

「ウーマン・イン・モーション」 ライリー・キーオ & ジーナ・ギャメル

2022年5月20日

エリザベス・ワグマイスター

ケリングの「ウーマン・イン・モーション」トークへようこそ。バラエティ誌のチーフ・コレスポンデント、エリザベス・ワグマイスターです。第75回カンヌ国際映画祭でケリングとのパートナーシップによる、この非常に大切なプログラムを続けられることを大変嬉しく思っています。

ケリングの「ウーマン・イン・モーション」トークは、映画界だけでなく、映画界を超えた女性の功績を称えるものです。これは映画界だけの話をしているのではなく、社会における男女平等を推し進めるということについてです。

今日はライリー・キーオとジーナ・ギャメルという二人の素晴らしいゲストをお招きしています。二人は『War Pony (原題)』で監督デビューし、共にプロダクションを持つビジネスパートナーでもあります。ライリーは俳優として幅広く活躍されているのでご存知の方も多いと思いますが、今回はカメラの後ろに回りました。そんな素晴らしいお二人にお話を伺えるのはとても楽しみです。それでは、早速はじめましょう。

エリザベス・ワグマイスター

まずは、おめでとうございます。

ライリー・キーオ

ありがとうございます！

エリザベス・ワグマイスター

ご自身の作品が入選して、カンヌで上映されることが決まったとき、どのような思いでしたか？

ジーナ・ギャメル

確か叫んだと思います。

ライリー・キーオ

本当に最後の最後まで知らされていませんでした。私は現場でトレーラーの中にいたのですが、ちょっとめまいがして、少し座りました。そして、私たちは、叫んでパニックになりました。全く予想していなかったことでした。このプロジェクトは、私たちが友人たちと取り組んだ、とてもパーソナルな企画で、それを後で見てくれる人の存在や、何かが起こるかもしれないということを忘れていたんです。カンヌはまさに...夢物語でした。ですから、かなり驚いています。

エリザベス・ワグマイスター

さて、これから映画についてたくさんお話を伺いたいと思います。その前に、お二人はどのように出会ったのでしょうか？お二人でプロダクションをお持ちで、今回が監督デビュー作ということですが、どのようにして

出会ったのでしょうか？お二人がパートナーになるまでの経緯を教えてください。

ジーナ・ギャメル

私たちは友人の紹介で出会いました。シネスピアの上映会で。

ライリー・キーオ

そうです、シネスピア・スクリーニングで。

ジーナ・ギャメル

『アメリカン・サイコ』の上映会の時で、今思うと私たちにはぴったりの場所ですね。それから、私たちはすぐに仲良くなりました。ライリーはその2週間後には私の家に引っ越してきたと思います。あの時、なぜライリーに家がなかったのか分からないけど。

ライリー・キーオ

それは自分の意思でしたね。

ジーナ・ギャメル

私たちは本当にすぐに友達になりました。そして、その後がとても早かった。彼女はずっと演技以上のことをしたいと感じていたし、私はまだ自分の目的を生きていないような気がしていたんです。私たちはすぐにコラボレーションを始め、色々な細々としたアイデアやクリエイティブなプロジェクト、執筆活動に共同で取り組み、それで友人になりました。

ライリー・キーオ

すぐに二人で一緒に執筆を始めました。

エリザベス・ワグマイスター

ライリー、私はどこかで読んだのですが.....といっても読んだことすべてを信じてはいけないのですが、俳優になる前は監督になりたいと考えていたという話を読んだ気がします。それは本当ですか？

ライリー・キーオ

本当です。何というか、それが私のやりたかったことで、脚本と監督がやりたかったのです。幼い頃、私は友達と一緒に小さな映画を作ったりしていました。演技をすることはありませんでしたが。演技も実はやりたかったのだけど、その気持ちはもう少し後で出てきました。ですから、映画を監督したり脚本を書いたりしたいというのは、私が元々もっていた願望です。

エリザベス・ワグマイスター

どのようにして俳優の道に進んだのですか？

ライリー・キーオ

私が演技の世界に入ったのは、ただ.....全部やってみたいという気持ちがあって、本当に楽しめそうだという予感がしたからです。

18歳位のときにオーディションを受ける機会があって、「やってみないとわからない」と思ったんです。そして、初めてオーディションを受けることになりました。もしそれがなかったら、俳優を続けていたかどうか分かりません。

最初のうちは、何というか「本当にやりたいことはこれなの？」というように感じていました。でも、それが実を結んだので、続けているんです。

エリザベス・ワグマイスター

ジーナさん、ご自身の生い立ちと、この世界に入ったきっかけについて少し教えてください。

ジーナ・ギャメル

私は幼い頃から... 父の仕事の関係で色々と旅することが多かったんです。でも、実は父は.....言いづらんですが、舞台演出家としては全然だめでした。母が妊娠したので、「家族を養うために仕事を探さなくてはならない」といって、結局辞めてしまいました。幼少期は家族でアートに触れる機会が多く、劇場や映画館に連れて行ってもらい、それが私の生い立ちの大きな部分を占めていると思います。

ですから、ライリーと同じように、私もかなり早い時期から監督や映画制作をしたいと思い始めていました。そして、私たち二人は、いわゆる恥ずかしいホームビデオをまだ持っているんです。

ライリー・キーオ

私のビデオは凄いですよ。

エリザベス・ワグマイスター

ライリーは「私のは恥ずかしくないから、自分のことだけにしてよ！」って感じですね。

ジーナ・ギャメル

そうですね。私は父を通して多くのものに触れることができ、とても幸運でした。そして、それは常に私の人生の目的の一部でした。

エリザベス・ワグマイスター

どちらか、何か追加したいことはありますか？

ライリー・キーオ

作品がカンヌで入選していなかったら、彼女は「これはただの趣味みたいなもので」と言うでしょうね。

ジーナ・ギャメル

そうですね。そしたら趣味ですね。

エリザベス・ワグマイスター

冗談で言っているようで、いいところを突いてきますね。お二人にとって、カンヌは映画監督として、次のステップに進むために、どのような意味を持つのでしょうか？

ライリー・キーオ

つまり、何かを作って、それが気に入ることもあれば、行ったり来たりすることもある。そして、他の人がそれを評価してくれることで、ああ、そうか、誰かがこれを見たいと言ってくれているんだ、と継続することができるんです。

ジーナ・ギャメル

検証のようなものです。私たちが作るどんなアートも、最後に見た人がOKと言ったように、カンヌがOKだと言っているんだ！と。だから、私たちは進み続けることができるのです。

ライリー・キーオ

そうですね。

エリザベス・ワグマイスター

では、映画についてお伺いしましょう。この映画は、特定のアイデアや目的があったわけではなく、偶然に生まれたものです。『アメリカン・ハニー』の撮影現場で、偶然に思いついたということですが、その原点となる物語についてお聞かせください。

ライリー・キーオ

2015年に『アメリカン・ハニー』を撮影していたんですが、現地で雇われた二人と一緒に撮るシーンが昼食後に押ししてしまったので、結局6時間くらいかかったんです。その時、彼らと本当に良い友達になれたんです。出会ってすぐに、話が止まらなくなるような、そんな友達関係でした。

そんな感じで、ただの友情から始まりました。私たちはサウスダコタのパインリッジに住んでいたんです。それで、私たちは友人たちと一緒に遊びに行くようになりました。ある夏、私はジーナを誘って遊びに行きました。当時、私たちは20代前半でした。ただの友達関係で、みんなものづくりに興味があったんだと思います。私たちは映画を作ることに興味がありました。フランクは音楽を作っていました。フランクは音楽を、ビルは庭をつくっていました。20代前半の私たちは、ただぶらぶらしながらミュージックビデオを作っていました。

アイデアはとても.....もうずいぶん前のことなので、とてもゆっくりとした時間の流れでしたね。携帯電話のメモに面白いアイデアを書き留めたのが始まりで、それが脚本になり、さまざまなバリエーションが生まれました。

そしてある時点で、どのくらい経ったかわかりませんが、1年後くらいに大枠と仮案のようなものができて、それから実際に腰を落ち着けて見るようになりました。正直なところ、趣味のようなもので、みんなで楽しみながらやっていたことで、特に目標があったわけではありません。まさかカンヌに行くことになるとは思ってもいませんでした。ただ、みんな楽しくやっていたということです。そして、それが映画になったのです。

エリザベス・ワグマイスター

どの時点で、趣味から(本格的な)映画になったのでしょうか？ ああ、私たちは本当に.....と気づいたのはいつですか？

ライリー・キーオ

資金調達ですね。何人かにこの映画を送ったとき、彼らがこれは面白い、となり、それで、「ああ、そうか。もっと真剣に取り組もう」と思いました。

エリザベス・ワグマイスター

この映画をご覧になった方がいらっしゃるかどうかわかりませんが、この映画がどのようなものなのか、お話しいただけますか？

ジーナ・ギャメル

ええと、それは...

ライリー・キーオ

プロットがない.....。
Cannes, 20 May 2022

ジーナ・ギャメル

筋書きがないです.....。

ライリー・キーオ

実験的な.....。

ジーナ・ギャメル

パインリッジ居留地に住む23歳の男と11歳の男の子の青春映画ですね。人生を扱った青春映画です。

エリザベス・ワグマイスター

キャスティングの過程について教えてください。

ライリー・キーオ

ああ、映画を作るんだ、という感じで、とてもゆっくりと進めていきました。ただ、みんなでワイワイやりたかったんだと思います。ただ一緒に時間を過ごしたかったし、楽しい趣味のようなものだったんです。それで、脚本が少しできたところで、地元の知り合いを何人か呼んで、オーディションを始めたんだと思います。即席のシナリオを作るんです。キャスティング・ディレクターのエレオノア・ヘンドリックスと一緒に、俳優が即興で演じなければならないシナリオを作りました。

ジーナ・ギャメルs

長かったですね。

ライリー・キーオ

長かったし、方法論があったわけでもなかった。誰かと出会って、「ああ、この人すごいな、どうなるか見てみよう」となるわけです。そして、その人たちを連れてきて、一緒に本を読む。また、プロデューサーが興味を持ち、脚本を送ってからは、より現実的なものになったと思います。キャストを集めるために、実際にキャスティングの旅に出るようになったと思います。

ジーナ・ギャメル

しかし、それはまた... 私たちはこの映画のキャスティングをすべて地元で行うことにとっても力を注いでいました。この映画のキャスティングのために、居留地の外に出たくなかったんです。そのおかげで、キャスティングの旅でなくても、旅に出ると、人に会っているうちに、突然誰かに会って.....というようなことがありました。

ライリーと私はガソリンスタンドで、この少年たちのグループを見たんですが、私たちがフランクとビルと共に作っていた、まさにビルとフランクの若い頃を再現したようなグループだったんです。私たちは車を止めて、彼らに話しかけました。そうやって、ガソリンスタンドで3人の少年に会ったんです。

だから、他の過程と同じように、驚くほど有機的なものでした。地元でのキャスティングにこだわっていたので、時間をかけました。

エリザベス・ワグマイスター

とはいえ、地元でキャスティングするということは、映画製作において信憑性が非常に重要であることは明

らかです。では、自分のものではない物語を責任持って語ることを、どのようにして確かなものにしたのでしょうか？どちらか、お聞かせください。

ライリー・キーオ

そうですね.....このプロジェクトは少年たちにとって非常に個人的なものでしたし、私たちの関係も個人的なものです。

最初から、彼らが言いたいことを一語一句、どう表現するかを書いていました。何時間も何時間も、ただひたすら、「じゃあ、どうしたい？」「こうなったらいいな」「こういうトーンにしたいな」「こういうカメラにしたいな」「こういう風にしたいな」と。「カメラをどう見せたい？」彼らは手持ちが嫌だったんです。細かいところまで全てです。「どう見せるか？」「どう感じて欲しいか？」「このシーンにどんな意味があるのか？」「どんなトーンにしたい？」といった具合にとにかく話を聞いて、私たちの視線はあまり入っていません。

だから、毎日、雇った俳優と一緒に、どの瞬間も正しく感じられるように、彼らのシーンが彼らにとって本物だと感じられるように、確認することでした。もし、そうでなければ、変更することもありました。なぜなら、この作品を観ると、即興で作られたように感じられるからです。

彼らは毎日、これは違和感がないか、共感できるか？といったことを考えながら行動していました。これは、共感できるものなのか、そして、これはこうではなく、こうあるべきだ、と言うんです。それで、台本にはこれを入れて.....と言われたり。

俳優と脚本家にとって、すべてが本物であると感じられるようにすることが、毎日の仕事でした。

ジーナ・ギャメル

間違いなくコラボレーションだったと思います。脚本があり、キャスティングがあり、撮影がある。その都度、最も直接的なコラボレーションをしている相手が誰なのかによって、常に進化し続けていました。というのも、撮影現場で俳優と一緒に仕事をすると、最終的には俳優が何を望んでいるかということに尽きるのです。だから、「責任を持って、意識的にコラボレーションする方法はないか」というのが、ある種の使命だったのだと思います。

ライリー・キーオ

ええ、地域社会と一緒にね。もちろん、多くの課題がありました。ただ単に...というわけにはいきません。7年かけて人間関係を築き、ニュアンスを理解する必要がありました。そして、それが私たちの目標になりました。コミュニティ間でいかに責任を持って協力するか。確かに困難はありましたが、私たちが成し遂げたことを誇りに思います。

エリザベス・ワグマイスター

本当の意味でのコラボレーションだったようですね。この映画のプロデューサーのひとりが、今まで多くの映画制作者がこの地域を訪れたものの、ただカメラを持ってやってきて、それで終わり、本物の物語とは思えなかったと語っています。でも、本当に7年間、手を取り合って仕事をしていたようですね。

ライリー・キーオ

そうですね、映画ではよくあることだと思います。映画作家として物語を語り、コミュニティに行って、「ここにはどんな物語があるのか」と考え、映画を作る。

そもそも、これはそういうところから始まったのではないと思うんです。20代前半の僕ら4人が、「まあ、いいか」という感じで、ただ楽しくて、違うところからスタートしたんです。実際の映画を作ろうという意図はなかった。私たちは、なんとなく...です。

だから、私たちの個人的な関係から始まったもので、私たちにとってとても重要なものだったんだと思います。

そして、友人や家族、親戚など、私たち全員の間で、このようなことに開花していったのです。そしてもちろん、歴史的に見ても、特にパインリッジは実在するものです。だから、自分たちがどのようにコラボレーションをするかということ、非常に意識していました。

7年間過ごしたコミュニティに、大勢の人たちやクルーを連れてくるというのは、とても大変なことでした。それが、私たちにとって最大のチャレンジのひとつでした。私たち全員にとって、私自身にとっても、ジーナにとっても...。ウィリーや他のメンバーの代弁はしたくないけれど、それは大変なことだった。

そして、どんなときでも、こんなことがあった、このクルーとはどうすれば.....と現在に意識を向けていなければならない。素晴らしいクルーがいたのですが、コミュニティにはニュアンスの違いがあり、それを毎日説明する時間はありませんでした。だから、前の週に会ったばかりの人たちに責任を持たなければならないのです。

だから、とても大変でした。でも、チャレンジなくして、このようなことはできません。私たちはただ、心をこめてリードし、どんなときでもできる限り心をこめて、責任を果たそうとしたのだと思います。そして、私たちはそれをやり遂げたのです。私は、みんながやり遂げたことを誇りに感じています。素晴らしいことでした。

ジーナ・ギャメル

素晴らしい。私たちは今、本当に大きな家族のようなものです。キャストや協力者だけでなく、彼らの家族とも、とても深い深い友情で結ばれているんです。私たちはとても幸運です。

エリザベス・ワグマイスター

おふたりにとっての初めての監督作で、役者も新人だったことで、みんなと一緒にこのプロセスを発見していたことが、マジックの一部になっていると思うのですが、それは本当に再現できないことですよね。

ライリー・キーオ

100% その通りです。そして、それは...とても自然なことだったと思います。映画を作ろう、なんていうことはありませんでした。もともと私たち4人で、やってみよう、送ってみよう、誰が気に入るか見てみようという感じだったんです。そして、「私たちが監督しよう」ということになったんです。この4人の中で一番映画の経験があるのは私達二人なので。だから、それを進めようということになったんです。

ジーナ・ギャメル

ライリーと一緒に初めて監督をするのがこの作品です、と誰かに言われていたら、それは無理だと思ったでしょう.....。今まで書いていたものとは、あまりにも違うから。

ライリー・キーオ

どの段階でも、「何が起こるか見てみよう」という感じでしたね。

エリザベス・ワグマイスター

以前に取り組んでいたのはどのようなプロジェクトですか？

ライリー・キーオ

私たちが最初に書き始めたのは、とてもお金のかかるSF映画でした。小さな映画で資金を調達するのがいかに難しいかを考えると、私たちがこの映画を作ることはできなかったと思います。私たちは何一つ完
Cannes, 20 May 2022

成させることができませんでした。ただアイデアを出し合うだけでした。当時22歳だった私たちは、ただ生活をしていて、そういえば...と思いながら、週末に一緒にちょっとしたものを書いていました。

でも、この作品は、ジーナと私の二人で、最初から最後まで脚本を完成させた初めての作品だったんです。だから、本当の意味での経験でした。一般的な脚本作りの経験とは全く異なるものだったので、それ以降、何か一緒に書こうとすると、とても興味深く、まったく違ったものになるのです。

エリザベス・ワグマイスター

今、何か取り組んでいることがあれば、教えてください。

ライリー・キーオ

ええ、今書いているのは、欲望と貪欲と人間関係とアメリカについての映画です...

エリザベス・ワグマイスター

ジーナはあなたを見ているですね。「何を言って良いのか、何を明らかにして良いのか」みたいな感じで。

ライリー・キーオ

ジーナは「何も言うな！」みたいな感じ。

ジーナ・ギャメル

いや、でも、彼女は全部言ってくれました。この作品は家族関係の物語で、彼女が言ったように、消費、貪欲、アメリカ、欲望、セックスなど、多くのことを扱っています。

ライリー・キーオ

大げさかもしれませんが、とてもシェイクスピア的な作品ですね。

ジーナ・ギャメル

まさにシェイクスピア的ですね。

エリザベス・ワグマイスター

ライリー、あなたが監督するプロジェクトに出演したいと思うことはありますか？

ジーナ・ギャメル

そうは思いません。私の脳の異なる2つの部分を使っているのです。演技をしているとき、私は指示される必要があるんです。ジーナがいると思うのですが、でも本当に指示される必要があるのです、同時に両方をこなすことはできないでしょう。視野が狭くなってしまう。ジーナなら私を指示できるかもしれないですね。私たちは姉妹のようなものだから、彼女が私を監督したらワイルドになるかもしれないわね。

ジーナ・ギャメル

おそらく最高傑作になるでしょうね。

ライリー・キーオ

そうね、いつかはね。

ジーナ・ギャメル

来年に早送りしてみると、彼女はトップスターになっている……

ライリー・キーオ

私は自分を見るよりも、他の俳優を見る方が断然好きなんです。

エリザベス・ワグマイスター

あなたはこれからも俳優を続けたいですか？ずっと両方やっていこうと思いますか？

ライリー・キーオ

そうですね。いずれわかると思います。私は、演技が大好きだから。

エリザベス・ワグマイスター

カンヌ映画祭では、メインコンペティションで女性が監督した映画は3本しかなく、控えめに言ってもがっかりです。この映画祭だけでなく、業界全体として、カメラの後ろにいる女性たちの地位を高めようとする動きがありますが、この業界の現状についてどうお考えですか？

ライリー・キーオ

それは、根本的なことだと思います。カンヌに応募できる立場にある女性が何人いたのか、気になります。そう思いませんか？どれだけの女性が必要な資金を得ることができたのでしょうか？私たちの経験では、特に男性の友人と比較した場合、それはとても難しいことでした。私たちは制作会社でもあるので、日々このようなことが起こっているのを目の当たりにしています。また、初めて映画製作をする女性よりも、初めて映画製作をする男性の方が多くの資金を得ていることも知っています。ですから、女性がリードすることに対する不信感は、非常に深いものがあると思います。そういうことが起こっていると思います。そして、それはとても根本的なことで、女性にはチャンスが必要なのです。

エリザベス・ワグマイスター

その通りです。初監督の映画作家は、より簡単に融資を受けられるようになったと言いましたね。でも、あなたは……そう、あなたは初監督ですが、この業界に何年もいるわけですから。

ライリー・キーオ

それが助けになると思うのですが。

エリザベス・ワグマイスター

つまり、あなたは…どうなのでしょう？あなたは有名になりましたが、ハリウッドの家系でもありますね。

ライリー・キーオ

そうですね。

エリザベス・ワグマイスター

あなたが部屋に入ったとき、人々はあなたが誰であるかを作品から、そしてそれ以上のことから既に知っているのです。もし、あなたが作品を作るのに苦労しているとしたら、それは一般の人にとってどのような意味を持つのでしょうか？

ライリー・キーオ

その通りです。もし私が問題を抱えているとしたら、それは女優でない人、私が持っているような人間関係を持たない人にとって、どういう意味を持つのでしょうか。私は、女性の映画監督とよく一緒に仕事をするのですが、そのような人たちをよく見かけます。一緒に仕事をしたこともあります。ジェニツァ・ブラボーの『ゾーラ』の場合、予算はそれほど大きくはありませんでした。彼女にはもっと大きな予算があるべきでした。彼女は初めて映画を作ったわけではありません。むしろ、天才です。そういうことが、まだ問題になっています。

エリザベス・ワグマイスター

『ゾーラ』といえば、ひとつ質問があります。あの映画に対する反応についてどう思われましたか？

ライリー・キーオ

たしかに、さまざまな反応がありましたね。私は映画に対する反応に魅了されています。芸術に対する反応は誰もが持つ権利があるし、特にその効果を生み出そうとするアーティストと一緒に仕事をするとき、ジェニツァのように、彼女は芸術についてつまらない会話をする人を求めてはいないと思うから、私はただ会話が合ったことだけに感謝するのみです。

エリザベス・ワグマイスター

先ほど、あなたが伝説的なハリウッドの家系であると述べました。

ライリー・キーオ

はい、そうです。

エリザベス・ワグマイスター

お聞きしたいのですが、俳優としての経験にとっては、役に立つと思う人がいるかもしれないですし、先入観になるかもしれない。あるいは、自分で名を成したいと思うかもしれない。私は... まず、ジャーナリストとして、一度に2つの質問をしてはいけませんね。

ライリー・キーオ

わあ、プロフェッショナルですね。

エリザベス・ワグマイスター

俳優としてスタートするとき、入り込むのはどうでしたか？

ライリー・キーオ

ええと...私が始めたとき、感じる代わりに...勝手に自分が感じていただけかもしれませんが、「さて、何ができるか見てみようじゃないか」というような見方、縁故主義のような見方を感じていました...。わかりますかね？だから、私は...。そして、私は本当に繊細なので、それは本当に緊張しました。すごく。だから「もう行こうかな」とか「ここにいてごめんなさい」と思ったりしました。それが、当時感じていたことの私の解釈です。

でも、確かにいろいろな意味で役に立ちます。より多くのリソースを得ることができます。私はエージェントを簡単にみつけることができました。私の友人たちがエージェントを探すよりもずっと簡単でした。でも結局のところ、あなたはそこに行って演技をしなければならない。正直とても緊張しました。「演技ができるかどうか見てみよう」みたいなプレッシャーがあった気がしました。私はできますよ。

エリザベス・ワグマイスター

できますよ。そして、あなたは本当に良い点を指摘しています。それは、どの業界においても、どんなコネクションもあなたを助けてくれるということです。例えば、エージェントが見つければ、そのドアに足を踏み入れるのに役立ちますが、その後、あなたは実力を示していかないといけません。

ライリー・キーオ

そうですね。

エリザベス・ワグマイスター

さて、ここで気になることがあります。これは私の質問の第2部です。今、あなたはカメラの後ろに立って、映画製作にとっても興味を持っていますが、まだ家族と結びついているようなイメージがあると思いますか？それとも、自分自身を切り離して、「今、私はこれをやりたい」と言えるようになったと思いますか？

ライリー・キーオ

音楽ではないので、本質的に分離していると思います。たしかに祖父母は俳優業をやっていたけれど、それが主な仕事ではなかった。

だから、世代的なものもあるし、自分のこと以外、あまり実感がなかったですね。「願わくは...」「ああ、好かれるといいな」と。でも、こういうことがあるからこそ、素晴らしい恩恵を受けることができた、とても感謝していますよ。

エリザベス・ワグマイスター

そして、運命のいたずらで.....。

ライリー・キーオ

そうですね！

エリザベス・ワグマイスター

あなたはカンヌにいます。そして、カンヌではエルヴィスの映画が上映されています。ご覧になりましたか？

ライリー・キーオ

はい、見ました。

エリザベス・ワグマイスター

どう思われましたか？

ライリー・キーオ

おそらく、とても長い答えになるとと思いますが、私が言いたいのは.....。

エリザベス・ワグマイスター

時間はあります。

ライリー・キーオ

OK。私が言いたいのは... 見ていてとても感動しました。私は母と祖母と一緒に見ました。姉たちと父とも一緒に。自分の家族についての話となると、見るのはとても強烈なことです。誰が自分の物語を語るか自由に決められるというのは、面白い立場だと思います。私たちは、誰かの話をするに関して、コントロールすることができないんです。他の人が話をするに関して、私たちはコントロールできません。そして、そこには「おおっ」と思うような何かがあります。これは私たちのものです。そして、そこには...

だから、最初は「うっ」と思ったと思うんです.....ちょっと「彼らには.....」という気持ちになるんですね。でも、バズにはいい仕事をしてほしいし、うまく行ってほしいと思います。そしてバズは、その...。私が初めて映画館で見た映画は、映画を作りたいと思った12歳の時の『ムーラン・ルージュ』でした。

エリザベス・ワグマイスター

すごい！

ライリー・キーオ

だから、それは本当に... 彼がこの映画を作ることに興味を示してくれたことは、本当に光栄なことでした。すぐに、つまり、私は彼のファンなんです。『ロミオとジュリエット』や『ムーラン・ルージュ』は、当時小さかった私にとって、とても衝撃的な作品でした。だから、「これは面白いな」と思ったんです。バズ監督に不信感を抱いていたわけではありません。でも、自分の物語や家族を守りたいという気持ちはありますよね。

バズの努力の跡を見ることができましたし、彼はみんなと一緒に座って、みんなに時間を与えようとしてくれました。私たちが見て、聞いて、感じたことに対して本当に心配してくれていることがすぐにわかりました。それは素晴らしいことでした。

だから、「正しい方法」で始めているのだろうとは思っていたけれど、実際にどんなものなのか、まったく想像が付きませんでした。

最初の5分くらいで、バズとオースティンがどれだけ苦労してこの作品を完成させたかが伝わってきました。5分後には泣き出してしまい、そのまま泣き止まなかったと思います。だから、初見では...。とても強烈な作品だったので、もう一度見たいと思います。

私たち家族には、家族のトラウマや世代を超えてのトラウマがたくさんあり、それはこのあたりから始まったようなものです。だから、とても強烈な体験でした。一日の終わりには、彼の本質を理解するために、彼の本質を感じるために、彼らが懸命に働いてくれたことを、とても光栄に思いました。

そして、私はとても...。自分の家族のことだと余計に批判的になるでしょ？オースティンの演技とバズが成し遂げたことにこれほど衝撃を受けるとは思っていませんでした。ええ、大好きです。そうですね。

エリザベス・ワグマイスター

バズはあなたのご家族に相談に来られたようですね。

ライリー・キーオ

そうですね。

エリザベス・ワグマイスター

それで、あなたはどのように関わっていたのですか？あなたのお母さんやお祖母さんは、彼らと話をしたり、彼らが必要とすることを手伝いましたか？

ライリー・キーオ

そうですね。バズは母と私と一緒に2、3時間話をしました。おばあちゃんも。どれくらいの時間を一緒に過ごしたかはわかりませんが、間違いなく一緒に過ごしていました。彼はとても熱心で...。私たち家族は、彼がグレイスランドに行くのを手伝ったり、彼が話す必要のある人に話をしたり、彼が必要とするリソースを提供したりと、協力してあげました。でも、私たちはバズ・ラーマンに映画の作り方を教えるつもりはありません。

エリザベス・ワグマイスター

私たちはちょうど同じ年頃です。『ムーラン・ルージュ』の話を聞いて、なるほどと思いました。私たち全員にとって...

では、そろそろ観客からの質問に移りたいと思います。

この映画についての最後の質問ですが、バズから出演のオファーはあったのでしょうか？

ライリー・キーオ

なかったですし、祖母は...私はオースティンと同じ年かそれ以上かな。だから...そうしたいとは思わない。ちょっと...近すぎるかな？

エリザベス・ワグマイスター

「見ているだけで十分強烈です」みたいな感じですね。

ライリー・キーオ

私はそれを演じるようなことはしたくなかったです。

エリザベス・ワグメイスター

でも、みんなすごく似ていますね。信じられないくらい。

ライリー・キーオ

そうですね。

エリザベス・ワグメイスター

だから、彼らはあなたに演じて欲しいと思ったのではないかと思いました。

ライリー・キーオ

実際、話にあがることはなかったですし、それはそれで美しいことだと思います。私はそうしたくはなかった。たぶんそこには、いい意味で尊敬してくれている境界線があったと思うんです。わからないけど。それに、バズ・ラーマンであれば、自分の映画の為に望むようにキャスティングできます。

エリザベス・ワグメイスター

それでは、観客の皆さんからの質問をお受けしたいと思います。マイクがあると思うのですが。

ジャーナリスト

ロッジ・キャリガンと一緒に仕事をしていて、現場で何を学びましたか？このシリーズをやるのはすごいことだったのでしょか？

ライリー・キーオ

ああ！そうですね…。ロッジ・キャリガンは素晴らしい監督です。彼は、私に自由勝手にやらせるのではなく、本当に指示してくれた最初の監督だと思います。それまでは、「私は好きなところを見るし、好きなところに座るし、途中で中断しないでね」という感じでした。彼は私に「瞬間」と「脚本に忠実であること」の重要性を気づかせてくれた最初の監督でした。彼はまた、とても素晴らしい人です。自由を与えてくれる一方で、演技面でもカメラ面でも明確なビジョンを持っていて……。ロッジとの仕事は本当に楽しかったです。

ジャーナリスト

もう1つお聞かせください。アンドレア・アーノルドは、ロッジ・キャリガンとそんなに違いますか？

ライリー・キーオ

まったく違います。正反対かもしれないですね。いや、彼女は素晴らしいですよ。彼女のやり方は、映画制作の方法としても非常に異なっていて、皆に身を任せ、部屋の中に消えていくようなものだと思います。そして、おそらく私がパフォーマーとして経験した中で、最も「現実の生活」「その瞬間」を感じる事ができたと思います。

ジャーナリスト

あなたは今、俳優と監督をされています。好きな映画や音楽は何でしたか？また、どんなカルチャーに興味を持って育ちましたか？

ライリー・キーオ

私はいつも、あらゆる種類のアートや映画、音楽が好きでした。音楽や映画では「ジャンルにこだわらない」方です。あらゆるものが好きなんです。アート映画も好きだし、ロマンス映画も好きだし、いろいろなものが好きなんです。音楽の趣味も似たようなもので、本当に色々です。

エリザベス・ワグmeister

では、ソーシャルメディアから寄せられた質問もご紹介します。

ライリー・キーオ

おお、なんと。

エリザベス・ワグmeister

どちらもインスタグラムからです。では、ジーナ、あなたから始めますが、ライリーにも同じ質問をします。あなたにインスピレーションを与えた女性監督を教えてください。

ジーナ・ギャメル

たくさんいますね…。

ライリー・キーオ

そうなの？

ジーナ・ギャメル

いや、リン・ラムジーは天才だと思います。ジャンクザ。クレア・ドニ。ジェーン・カンピオン。たくさんいますね。

エリザベス・ワグmeister

他に追加する名前はありますか？

ライリー・キーオ

女性監督と一緒に仕事をすると、その日、その瞬間に、本当にインスピレーションを受けます。ジャンクザは、私にとって本当にインスピレーションの源でした。彼女は、撮影現場をコントロールし、明確なビジョンを持っていると同時に、私がこれまで経験した中で最も自由なパフォーマーでもあります。彼女は……誰もが「俳優の監督」と言いますが、私にとって、とても深い意味での「監督」だったのです。そのとき初めて……。自分がちょっとしたことをしたときに、カメラの向こう側にいる人が「私はそれを見た」と言ってくれる、そんな感じでした。

エリザベス・ワグmeister

ジーナが「たくさんいる」と言ったとき、ライリーは「そうなの？」と聞きました。

女性監督の統計にちなんだものです。これはソーシャルメディアに関する質問ではありません。でも、もう一步踏み込んで質問させてください。業界や生活の中で、あなたに影響を与えた女性は誰ですか？

ジーナ・ギャメル

ライリー

ライリー・キーオ

私はジーナと言おうと思ったんだけど。

エリザベス・ワグmeister

ありがとうございます。もう一つ質問があります。これはライリーへの質問です。あなたの祖父の記憶は、今日のアーティストとしてのあなたを形作っているのでしょうか？

ライリー・キーオ

それはないと思います……。まあ、わかりませんが。多分、私のDNAのどこかにあるのでしょうか。でも、記憶というのは…。私のすべての物語が、私というアーティストを形作っているのだと思います。私の家族全員、そしてそのすべての瞬間が、きっと私という人間の大きな部分を占めているのだと思います。

エリザベス・ワグmeister

どうもありがとうございました。会場の皆さん、質問をありがとうございました。ライリー、ジーナ、ありがとうございました。

ジーナ・ギャメル

ありがとうございました。

ライリー・キーオ

ありがとうございました。